



自治労音協通信

第73号

2011年8月9日発行

発行責任者 会長 磯野 友一
編集責任者 事務局次長 小川 典子



第44回はたらくものの音楽祭IN高松！

テーマ 瀬戸に響け、いのちの歌

大成功 2012年は6月上旬栃木県小山市予定



上：飯島貞親実行委員長（日音協会長）
下：香川県実行員会小川俊委員長

日本音楽協議会は、第44回はたらくものの音楽祭を、7月2日（土）午後1時30分から3日（日）香川県県民小ホール（アルファあなぶきホール）で全国から300人が参加して開催した。

実行委員長の飯島貞親（日音協会長）は「瀬戸に響け、いのちの歌」をテーマに四国で初めての開催となった。日常の活動を音楽で交流しようといさつした。

香川県実行委員会小川俊（連合香川）委員長は音楽祭の成功のため多くの連合傘下の単産の結集に努力してきた。みなさんの音楽を通しての活動を支持し音楽祭の成功を祈念する。また、香川の風土と特産品を味わって欲しい」といさつした。

★演奏について
すべての出演団体がそれぞれ個性を出し合い表現していた。「国鉄歌声サークル トレインズ」は、

スポットライトの「輝士」の岸本さんは、オリジナル曲を演奏するに際して、真摯な緊張感が伝わり好感が持てる。演奏もメリハリがあり、ギター、ピアノによる弾き語りの基本を、多くの関係者が学ぶことができたのではないかな。



「真紅」は大きく成長した娘たちのハーモニーが、リスナーを感動させたであろうことは疑う余地もない。来年が期待される。



国鉄歌声サークル トレインズ

過去の闘いの歴史を思い起こさせる毅然と前を向いた心に響く歌声だ。闘いの経験のない若者にはどう感じたか。



スポットライト岸本輝士さん

裏方、特に音響（PA）、照明関係者の努力に感謝。舞台係のまとまった行動がかいま見られたが、惜しいことにマイクのコントロールでは音出しの調整連絡に手間取り、演奏者にかなりストレスを与えている。出ていない音を確認する連絡調整は慎重かつ敏速にすべきであり、音響係の使命（生命線）でもある。

★その他
舞台の背景の動きのあるモニメントと銀の構造物が、瀬戸内の波と光を表現していてとても舞台を引き立てた。

合唱の場合のマイクコンデンサBLMが一人ひとりの声を引出し、なおかつ一つにまとめる効果があり成功した。



高松市マンドリンクラブ
「高松市マンドリンクラブ」は、細川氏の指揮もさることながら、息の合った日常の練習の成果を出した、聞きごたえのある演奏だった。

♪ 事務局から
のお知らせ

みなさまからの投稿をお待ちしています！

E-Mail: jicogawa@jca.apc.or.jp 住所変更は必ずお知らせください！

『自治労音協ホームページ』 <http://www.jca.apc.or.jp/~jicogawa>

『自治労と音楽のページ』 <http://www33.ocn.ne.jp/~tmatsu>

『日本音楽協議会』 <http://www.yomogi.or.jp/~uncle>

(通算24回)

第3回自治労音協コンサート

ゲスト真紅のハーモニーが響く

7月1日(金)午後6時から高松市文化芸術ホール(サンプォート)アートヴィレッジのリハーサル室に、全国から50人が参加して第3回自治労音協コンサートを開催した。ゲストには長野県青木ファミリー(真紅)が出演した。長野、富山を中心に日音協の仲間も駆け付けた。

コンサートは、岡光子さんの司会進行で進められ、冒頭、自治労音協会長の磯野さんから、「大震災の中、被災地の仲間たちも大変な中で今日まで音楽祭の開催に努力してきた。前段の自治労コンサートでは会員の交流の場として有意義な場にしていこう」とあいさつ。



三好香川県本部副委員長(左)
今井千代子副委員長(右)



鬼澤佐智子、山本親広、久保田栄一、岩浪啓一、[写真下]リーダー菊池正彦

●WEED(茨城)
「うたのちから」作詞・曲 桃井雅和、「同じ星に生きて」作詞山本親広、曲江崎文雄「君らしく」作詞・曲

地元三好康夫香川県本部副委員長は「香川県開催が決まり、多くの困難の中、連合等の単産の協力もあり、明日からの音楽祭の開催にこぎつけた。音楽祭前段の自治労コンサートでは、会員の発表の場として有意義な時間を過ごそう」とあいさつした。また、今井千代子副委員長も駆け付けた。



山城文雄、平良昌史、嘉数正光(沖縄那覇市職労)

●M&MS(エムアンドエムス)(沖縄)
岩浪啓一の3曲を、鬼沢さんの力強いボーカルで、息の合った演奏でそれぞれの曲想を表現した。

●高田義徳(香川)
音楽祭事務局長として奔走してきた高田さんは「社民党県議会の1議席を守るため、老人ホームや老人サロンに呼ばれて歌っている。この活動のおかげで当選できている」と語り三線で「東京節」「ストトン節」(作詞添田さつき)の2曲を演奏した。



三線で歌う高田義徳さん

ナル曲や、労働歌を歌い広める活動もしていくことを確認した。6月17日には、沖音協と語りつぐ沖縄平和会の、平和コラボ「第1回平和音楽祭」を開催した。また、宮城康一さんグループと一緒に康一さんの店で、毎月第1土曜日の夕方、定期合評会を行うことも決まっている。そこでも「m&m s」で、平和の歌を歌っていったらいいなと思う。

●山本英二(新潟)
昨年の音楽祭事務局長の山本さんは「新潟での音楽祭、コンサートが皆さんのご協力で大成功でした。」と語り、「笑顔が見たくて」作詞・曲山本英二をクラシックギターのアレンジにのせて、さわやかな歌声を披露した。



クラシックギターで歌う山本英二さん
左写真はシングアウト



ゲスト真紅のさわやかなコーラスが静けさの中に響く

●ゲスト「真紅」

自治労音協コンサート第2部は、ゲストに青木ファミリー「真紅」を長野からお呼びした。

プロフィールには「朧月夜の里、長野県飯山市よりパールの里でお馴染みの青木ファミリーです。赤ちゃんの頃から音楽祭に参加していた娘達もこんなに大きくなりました。そして、真紅として皆さんにハーモニーをお届けします」とあったが、青木ファミリー



青木康美(母)長女瀬奈(19歳)次女良夢(17歳)三女美夢(14歳)の家族4人



「真紅」仲良し4姉妹(3姉妹と青木康美さん)

ミリー4人のアカペラによるコーラスはリスナーの心に感動を呼び起こした。「そのまま」「はじめのことば」「あたりまえの地球」「手紙」を発表した。

●山本親広(茨城)

WEEDの山本さん。今回は「原点回帰」として久々に「ピン」でいきますと、「鉱夫のいのり」作詞・曲高田波、「明日なき世界」作詞・曲バリーマダガイの2曲を演奏した。

●ONE PEACE(東京) 狭石啓子+利美

「何もいない地球」作詞・曲梅山忠信、「ケサラ」作詞・曲フォンタナ・作曲Cベース「アジアの風」作詞・曲磯野宏之の3曲を演奏。

●くれつしえんど

坂口美日(東京)・原佐由理(長野)の保育師のユニットです。高野直美(新潟)さんは保育所の行事で今回参加できませんでした。発表曲は「まあるいのち」作詞・曲イルカ、「キャベツ」、作詞・曲加藤正和の2曲を松本敏之さんのピアノ伴奏で歌った。



左から坂口美日子さん、原佐由理さん



左から狭石啓子さん、利美さん

●松本敏之(栃木)

最後は音楽祭事務局長として奔走してきた松本さんが2曲を演奏した。



★音楽祭自治労音協発表

今年は「和平と愛実」「プレゼント」の2曲を総勢30人で合唱した。伴奏はWEEDのメンバー。指揮は磯野友一会長。



音楽道

大震災被災者支援
在日コリアンとともに気仙沼に楽器を贈る

荒川区職労書記長 白石 孝

■気仙沼市民吹奏楽団に楽器贈呈

5月21日、気仙沼市役所玄関で4本の管楽器を気仙沼市民吹奏楽団の楽団代表や楽団員に贈呈した。

楽団は3月10日夜が定例練習日だった。そして翌日、チューバほか何本かの楽器が車内で、あるいは自宅で流されたという。楽器を贈呈するきっかけになったのは、自治労運動で30年近く交流を積み重ねていた仲間が現在、大震災対応や復興に関する現場の先頭で奮闘していることを知り、激励に訪れる話し



チューバを吹く気仙沼市民吹奏楽団の団員

が持ち上がったことからだ。さらに、楽器を贈る経過は次のように。

■サムルノリ荒川公演の収益金を文化支援金に

1987年、在日コリアンの知り合いとともに、朝鮮半島に伝わる伝統芸能を荒川に住む在日や日本人に紹介しようと、「サムルノリ荒川公演」を開催した。公演は約1,100人収容のホールに1,500人が押し寄せるといふビッグイベントとなり、黒字となった。

主催の実行委員会「サムルノリを観る会」では、収益金を日韓・韓日の文化交流や民族教育に充てようと話し合っていたが、結局は使われないまま25年の歳月が流れ、高金利時代を挟んだこともあり、100万円ほどに膨らんでいた。

震災直後のある日、代表を務められていた呉崙柄(オ・ユンビョン)さんが組合事務所にはひよっこ現われ、「白石さん、この機会に使わないと一生使わずに終わってしまう」と相談を持ちかけてきた。

私は「では在日の被災者に使いましょう」と答えると、彼は「そうじゃなくて、一般の日本人を応援したい。できれば文化支援に」と。

そこで、たまたま訪問予定のあった気仙沼市職労元委員長に相談したところ、「市役所の仲間に吹奏楽団の主宰者がいて、楽器を流された」と聞いた」との返事が来た。

数日後、流された楽器のリストが気仙沼からファックスで届き、いざ購入する段になり、楽器を吹いたことがない私では選べない。そこで、ミュージシャンに協力してもらおうと、梅津和時とバンドを組んでいる多田葉子さんに電話をしたら、「いい話だから協力したいけど、自分はサクソとかオーボエなので選べないから、誰かを探すよ」と、さらに紹介されたのが、トロンボーン奏者で洗足学園講師もしている松本治さん。

いきなりの電話に、「協力出来るよ」と快く引き受けていた。松本さんがヤマハ楽器などに問い合わせた結果、「50万円です3本揃えるのはヤマハでは無理で、下倉楽器ならいけるかもしれないし、協力したいと言っているよ」とのこと。

二人で待ち合わせ、お茶の水の下倉楽器に行き、2時間くらいをかけ、何本ものチューバ、

トロンボーン、トランペットを吹き、マウスピースも試した末、新品と中古の3本が決まった。楽器店からはマウスピースなどの現物寄付もいただけた。

実行委予算の50万円に10万円を加え、60万円で購入した。

翌日、車に3本を積み込み、呉さんを乗せ、一路気仙沼に向かった。

ユーフォニウムは、仙台の自治労仲間のお嬢さんが、全国大会出場校の仙台向山高校吹奏楽団当時に愛用、一生の宝物としていた英国製の貴重なものを、お手紙を付けて提供してくれた。

■ミャンマー(ビルマ)難民キャンプの図書館の支援

さて、サムルノリを観る会では、もうひとつの支援を予定している。それは海外で被災、避難生活を余儀なくされている難民への支援だ。

私から「日本から最も近い難民キャンプ」であるミャンマー(ビルマ)難民キャンプの図書館の支援を提案して決めた。

現ミャンマー軍事独裁政権は、少数民族の浄化作成を展開しているが、その対象であるカレン族の民話絵本出版と決め、来年出版する準備を予定している。

民族のアイデンティティを守る事業に協力したいという呉さんの思いは、在日の歴史や三世

四世の子どもたち相手の民族教育運動から発想されたものだ。原因や背景は様々だが、自分の家、村、国に住むことが出来ず避難生活を送っている人々は全世界に存在している。

パレスティナを例にとるまでもなく、何代にもわたり自分たちの国や村に帰れない人々が多い。そういった状況にあつて、家族、コミュニティ、そして民族の絆やアイデンティティを守り続けることには大きな意味がある。

在日の存在そのものから呉さんが導き出したのは、気仙沼とカレン難民キャンプとの両方を応援することだった。

実は、ミャンマー難民キャンプについては、荒川区の労使で取り組む「給与の端数を毎月天引き」するボランティア貯金制度(任意参加)の最初の支援先として、キャンプ内図書館の建設支援事業も予定している。

私は6月はじめその難民キャンプを訪問した。タイ側国境沿い2千キロに9のキャンプがあり、約15万人が長くは30年も暮らし、そこに22の図書館があり、そのひとつメラウ第3図書館を訪問した。

この報告は次号で詳しく行いたい。(つづく)

盛り上がった交流会

JP音協のみなさんも家族で参加



第19回自治労音協総会

新事務局の承認 菊池正彦さん(茨城県牛久町職労)を承認

■総会で新事務局員選出

7月1日コンサート終了後、交流会会場の「黒船屋」で、簡単に総会を開催し、狭石さんが定年退職され、事務局の補充に、茨城県の菊池正彦さんを選出しました。

2012年度は、6月16・17日に開催される音楽祭に合わせて、15日(金)に第4回自治労コンサートを開催予定です。

■2012年度活動方針

2011年度活動方針(2011年7月2日・2012年6月15日)

1. 自治労音楽協議会の組織を確立します。
 - (1) 自治労の組合員で音楽活動をしている人々に、音協加入を積極的に呼びかけます。
 - (2) 各県、地連ごとの会員、サークル間の連絡をつくりだすとともに、できるところから県支部を結成します。
 - (3) 幹事会を開催します。
 - (4) 次期総会は、2012年の第45回はたらくものの音楽祭(2012年6月上旬、栃木県小山市開催予定)と同時期に開催します。
 - (5) 自治労との組織的な関係の確立を引き続きめざします。
 - (6) サークル活動の活性化をめざします。
- このために第4回自治労音協コンサートは6月15日に開催します。

2. 自治労の音楽・文化事業に協力します。

自治労の音楽・文化事業は次のようなもの

が計画されています。これらに積極的に協力し、会員の参加を呼びかけます。また、さらに音楽・文化事業を拡大するようはたらきかけます。

- (1) 青年女性地連別交流集会／文化班
- (2) 労働学校での歌唱指導など

3. 日音協の活動および事業に協力します。

(1) 日音協会員加入 年会費10000円
また、日音協会員で地域支部に所属できない人たちが構成する、日音協自治労音協支部を結成します。

- (2) 日音協セミナー
- (3) ブロック別日音協合宿
- (4) 第45回はたらくものの音楽祭(2012年)
- (5) 機関紙『音楽運動』のネット会員の拡大

4. 各地域で独自のコンサートなどを追求します。

当面、滋賀県支部などで開催しているコンサートや、県支部の結成を目指すとともに、サークルまたは県単位で自治労音協会員合同のコンサートなどをめざします。

5. 自治労音協仲間の歌〇を作成し、会員に配布します。

■交流会で盛り上がる

交流会には、ゲストの青木ファミリーやJP音協の皆さん、地元香川県本部、音楽祭スポットライトに出演の岸本輝士さんも参加して、大いに盛り上がりました。

♪Yes I do

京都市東山区祇園縄手通末吉東入南側
井みねビル4F

TEL 075-531-5737 H・P 090-2040-2074

日音協近畿の井戸久喜さんが ライブパブを始めました。京都にお立ち寄りの際にはお越しください。

私のギター人生

ギターに魅せられて

パート11

狭石 利美(東京)

■はじめてのコンサート

センターにギター教室を作り、そのうち合奏をやるようになり、ラグリマというサークルに性格を変え、いろんなところに頼まれて演奏するようになっていた。そのうち誰からともなく、「コンサートをやろう」と話がまとまっていった。演奏面では私の兄弟子である松尾先輩の加入が大きかったが、興行面ではなんとと言っても織田和也(今ではあのシングルトリオのリーダー)の活躍が大きかった。織田は、引込み思案ぞろいのラグリマの中では珍しく目立ちたがり屋で、しかもチラシやプログラムを作るのが得意だった。ギター暦は一番浅く、したがってあまり上手くはなかったが、コンサートに向けてのムードメーカー的存在だった。多分彼にとつては人生の中で最もギターを引いていた時期だったと思う。(その後ラグリマ三回目のコンサート)のチラシに彼はなんと「ギターのある人生を僕たちは選んだ」などと大仰にも書いてしまったのだ。

■音と呼吸がそろうまで

日にちを決め、会場を借り、プログラム(合奏曲)を決める。すると毎週水曜日の練習は一段と熱が入る。独奏曲は各自自分の家で練習するからセンターでは合奏と二重奏(一曲だけ松尾さんとソルのアンクラージュマンをやった)の練習だけになる。合奏だけで十曲ほどやったから練習も結構時間がかった。

いつもは九時ごろには終わって飲みに行っていたのが、コンサートを決めてからは十時ごろまでやるようになった。前から取組んでいた曲はさつとやって、新しい曲とか合わせるのが難しい曲とかを中心に練習した。

メンバーはたった五人だから指揮者なんかいない。みんな「ここはそうじゃなくてこう弾こう」とか言い合って曲想を固めていく。みんなの音が揃い、呼吸が合うまで、何回も何回も納得がいくまで練習した。

■食べ物などのとまらない

いよいよコンサートの日がやってきた。なにしろ初めての自分たちだけのコンサートだ。朝から緊張のあまり食欲が出ない。確か夕方の打ち上げのときまで何も食べなかったような気がする。

少しでもリラックスしようと、大リーガーを真似てガムを噛んでいた(どうも大リーガーのガムはリラックスするためではなく、ボールを打つ瞬間に凄いい重力で歯をかみ締めるので緩衝材として噛んでいるらしい)。

ビデオを見ると、さすがに演奏中は噛んでいないが合奏や二重奏のときなど、演奏の合間に口をもぐもぐやっている。聴いてくれる人に何と非常に失礼なことをしたのかと思うがその時止めてくれる人は誰も居なかった。あの口うるさい(ごめんなさい)妻も、そのコンサートの司会を頼んでいたのだが何も言わなかった。

緊張して飯ものを通らないのがかわいそうに思えたのかも知れない。でもそれにしても、「狭石は緊張する(あがる)ことを知らないやつ」という事実を反した評価が勝手に広まっている。態度(ふてぶてしく見られることがある)でそう見られるのだから、「人は見かけによらない」というのは真実だ。

また、「あがらなければ良い演奏は出来ない」のも真実だ。

■あがることは必要なこと

「私の演奏歴の中で、演奏前に緊張したり上がったりしなかったことは一度もなかった。これまで何千回とコンサートをしてきたが、そのたびに初舞台のときと同じくらいあがる。君、気がついていないか？」

「冗談なんかではなく、この不安にはお手上げだ。ステージに立つたびに胸がきりきり痛みだす。私は自問自答するんだ、どうしてこうなってしまうんだ？でも現にそうなんだ、とね。不思議なものだよ：私くらいの歳になってもこればかりはどうしようもないなんて」これは世界的なチェリスト、カザルス80代の言葉だ。これ以外にも「あがる」ことについて彼のエピソードはいろいろ伝えられている。

これを知ってからは、私は「あがる」ことは演奏にはむしろ必要なことだと思ふようになった。それまでは人前で演奏するとあがつてしまっと思うように弾けなくなる、いつもどおりに指が動かなくなってしまう、だからなんとかあがらないように出来ないものだろうか、と考えていた。

あがらないということは、平常どおりの気分で弾くことだ。

■不安材料をなくす

あがるのは必要だが真つ白になつてはいけない。ではどうすればいいのか。答えは簡単で「不安材料をなくす」ことだ。不安な箇所があると演奏中に「そこで間違えるのでは」、などと余計なことを考えはじめ、曲に集中できなくなる。

練習のときノミスで弾けるまで練習すること、解決策はこれに限る。大体練習で上手くできないことを人前でやろうとするに最初から無理がある。すべての不安材料をなくし、すべてを曲に集中したい、演奏家の夢だ。(つづく)



パブロ・カザルス、スペインのカタルーニャ地方に生まれたチェロ演奏家、指揮者、作曲家。